

## 仏心寺・チルドレン・スクール開講



遅くなりました。やっと、仏心寺のニュースをお届けすることができます。仏像（ご本尊）の開眼法要を開催して1年4ヶ月、あっという間に過ぎてしまいました。昨年は、ブダガヤの日本人団体旅行客は少なかったようです。世界情勢が少なからず影響しているのではと考えますが？。

そんな中、仏心寺を管理してくれているオーム・プラサド氏が11月来日。彼らから、チルドレン スクール(children school) を開設してくれないかとの提案がありました。施食や医療の事業に、その場限りという感を強く抱いていた私達にとって、未来につないでゆく子供達の教育こそ本来の事業と、早速各理事に承諾を得て進めていただくようお願いをしました。その第1報が12月の末、旅行社サライの福田氏を通じて届きました。先生は一人で、人数は、40～50人程度、年齢は小学校に上がる前の子供達を対象（少し大きい子もいますが）に、本堂と宿坊の間の庭を教室として行われています。

また、4月にオーム氏が再来日した時の報告では、制服を作ったとのこと。貧富の差があるので勉強する時は、皆同じにという事からだそうです。生徒達は、仏心寺に来て制服に着替え授業を受けているようです。また、天気の良い日は庭で雨の日や日差しの強い日はロビーにカーペットをひいて授業をしています。

今後も、私たちに課せられた問題はたくさんあるのですが、にこやかに笑っている子供達の顔を見ますと、（日本では当たり前になり教育を受けられる喜びを忘れてしまっている私たちですが）一つ一つ問題を解決し継続事業となっていくようにしたく思っております。



## 旅人からのお便り

### インド・ブダガヤの旅

東京都練馬区在住 窪田 清子 さん



お釈迦様に会いたい、お釈迦さまの聖地インドに行きたいと思ったのは夢の中に出てきた仏像が始まりでした。早速、旅行社のサライさん・プラサドさん・福命寺の内田さんに、連絡を取りました。いざ出発となり、英語の片言な私は一人で行くことが非常に心細く喉元まで恐怖でした。でも行かないことには何も起きない変わらないと感じ「えーい」と行動に移し飛び立ちました。ブダガヤ飛行場に到着した私を迎えに来てくれた、サンジャイさん・プラサドさんのご兄弟に感謝します。夕焼けの美しい道を通り、荷物と私は仏心寺に着きました。

朗らかそうな気のいいチベット出身の管理人のお兄さんが、鍵の開閉を教えてください、お互い身振り手振りで話をしました。私の部屋は1階の端、ベッドが3台・シャワー室（お湯可）・トイレ・洗面台があり、となりの炊事場は共有であまり使われていない様子。私は、朝食と夕食はスジャータホテルで取りました。一服しているとお兄さんが屋上に案内してくれました。眼下には田舎の景色が広がり、見渡すと大乗教寺院の大仏や大塔（お釈迦様の仏塔）が見えた時にインドに来たんだと実感しました。翌日からは、昼間は街中をサンジャイさんから借りた自転車（サドルが高い）ふらふら、私も自転車も最初はふらふら、しかしこの自転車が二十日間の私の良き足になってくれました。ブダガヤでは、牛・野犬・山羊が沢山同じ道を歩いています。今の日本にはないことで軽いカルチャーショックです。また、朝5時起きで近くの日本寺に朝のお勤めに伺うときにも、自転



車は大事な足となってくれました。夕方5時から、米国の学生（三十名）が十四日間の「禅の修行体験」をしているお仲間に参加することができました。またこのご縁で日本寺の駐在僧・谷口妙照さんとも親しくさせていただきました。彼女は、ざっくばらんな人で笑顔のとびきり上等な方、いつも出会いは嬉しいですね！。そうそう、毎朝管理人のお兄さんが眠い目をこすり門扉を開けてくれるのを思い出しました。

ゆるりとした時間が流れるブダガヤで自転車の気の赴くままにブータン寺・中国寺・チベット寺・タイ寺を巡り、買い物・昼食などをしながら過ごしているとすぐに夕方です。街中の洗濯屋の家族、ホテルの従業員、屋台の少年（出稼ぎ）笑顔の交換と挨拶、ナマステ大きな太陽が静かに落ちて行きます。私にとって至福の時間それは大塔の菩提樹の下に行き体中の力を抜き、ぼーっとしてエネルギーを浴びている時、その空間に釈迦の心を感じただただ抱かれたい、そう思ったものです。

私は、帰国してから少し変わりました。ほぼ毎日「般若心経」のCDを聴きながら眠りにつきます。目覚めも良いです。インドの旅で、ご縁のありました皆様に心より感謝いたします。

## 悠久の国インド 交流の旅

この度、仏心寺の理事であります内田卓也が子供達を対象にインド交流の旅9日間（仏心寺に2泊）を企画いたしました。内田理事は、以前より不登校の子供達を支援するNPO・京都教育サポートセンターに関わっており、活動を続けてまいりました。画一化された教育の中で、悲鳴を上げている子供達は決して不登校の子供達だけではありません。こんな子供達に日本とは違う世界を体験させてあげたい。インドの人達を通じて、生きる喜び・日常生活の楽しさを教えてあげたい。こんな内田理事の思いが、この企画となって実現することとなりました。子供達には、一生に一度しか体験できない旅行かと思えます。このご縁に、お子様・お孫様・お知り合いの皆様にもお勧めいただきとう存じます。問い合わせは、(株)サライ0120-408-128まで



